

第一期PFI事業整備等浄化槽
保守点検等包括業務に関する
条件規定書

平成27年8月21日

富田林市
(上下水道部下水道課)

富田林市（以下「市」という。）が実施する第一期PFI事業整備等浄化槽保守点検等包括業務において、市と事業者が締結する第一期PFI事業整備等浄化槽保守点検等包括業務契約（これに付随する契約を含む。以下「業務契約」という。）の基本的事項を規定するため本書（以下「本書」という。）を定める。

業務契約は、別紙4-3に示す富田林市業務委託契約約款のほか、本書を含む「入札説明書」に規定された条件及び質問回答並びに業務提案を基に締結する。

なお、本書のうち「業務提案の内容に基づく」旨の記載のある事項に係る内容は、事業者が決定した後に、業務提案を基に市と提案者との協議により取り決める。

目 次

第 1 章	用語の定義	3
第 2 章	業務の主旨の尊重	3
第 3 章	事業の概要	3
第 4 章	本業務の実施方法	3
第 5 章	第三者による実施	4
第 6 章	第三者に与える損害	4
第 7 章	不可抗力による損害	4
第 8 章	契約の解除	4
第 9 章	不可抗力等に伴う措置	5
第 10 章	契約解除に伴う損害賠償等	5
第 11 章	契約終了時の措置	5
第 12 章	権利義務の譲渡の制限	6
第 13 章	支払い遅延損害金	6
第 14 章	保険加入義務	6
第 15 章	守秘義務	6
第 16 章	疑義に関する協議	6
【別紙 4-1】	浄化槽保守点検実施細目	7
【別紙 4-2】	富田林市業務委託契約約款	9

第1章 用語の定義

本書において使用する用語の定義は、以下のとおりとする。

- (1) 「本業務」とは、業務契約に基づき実施される「第一期PFI事業整備等浄化槽保守点検等包括業務」をいう。
- (2) 「事業者」とは、本業務を受託する事業者をいう。
- (3) 「業務提案」とは、入札参加者が応募時に提出した提案書及びその内容をいう。
- (4) 「浄化槽」とは、第一期PFI事業により設置並びに寄付を受け保守点検する浄化槽をいう。
- (5) 「事業期間」とは、業務契約成立後から平成35年3月までをいう。
- (6) 「不可抗力」とは、暴風、豪雨、洪水、高潮、地滑り、落盤、落雷、地震、火災その他の自然災害、または騒乱、暴動その他の人為的な現象であって、市及び事業者のいずれの責めにも帰さないものをいう。

第2章 業務の主旨の尊重

- 1 事業者は、本業務が生活環境の保全及び地域公衆衛生の向上を図ることを目的とするものであることを十分理解し、その趣旨を尊重し、並びに本業務の実施に係る法令等を遵守し、本業務に当らなければならない。
- 2 市と事業者は、本業務が民間事業者の総合的な技術能力を活用して実施されるものであることを十分理解し、業務の円滑な推進に向けて相互に協力、協調するものとする。

第3章 事業の概要

本業務で実施する業務は、次の各号で構成される。

- (1) 浄化槽の保守点検
- (2) その他これらに関連する業務

第4章 本業務の実施方法

- 1 市及び事業者は、富田林市浄化槽整備推進事業に関する条例、業務契約、入札説明書及び業務提案の内容（以下「提案内容」という。）に基づき本業務を実施するものとする。
- 2 業務契約、入札説明書等、提案内容及び委託契約約款において調整すべき事項が生じた場合は、業務契約、入札説明書、提案内容及び委託契約約款の順にその適用を優先するものとし、必要に応じ市と事業者が協議の上、これを決定するものとする。

- 3 本業務の実施細目は、別紙4-1に定めるところによる。
- 4 市と事業者の責任（リスク）分担は、個別に規定するもののほか、業務要求水準書に定めるところによる。

第5章 第三者による実施

事業者は、第3章に掲げる業務の一部について、第三者に委託してこれを行う場合、当該第三者の責めに帰すべき事由は、全て事業者の責に帰すべき事由とみなして事業者が責任を負うものとする。

第6章 第三者に与える損害

本業務を実施したことに伴い第三者に与えた損害については、事業者がその責めを負うものとする。ただし、損害のうち市の責めに帰すべき事由により生じた損害等については、その限度において市がその責めを負う。なお、避けがたい事情が存する場合は、市と事業者が協議して、負担と責任の範囲を定めるものとする。

第7章 不可抗力による損害

本業務の契約期間中における天災等による浄化槽の滅失など不可抗力事由による損害は、原則として市の負担とする。ただし、不可抗力事由の発生時における事業者の応急対応、市への連絡通知など事業者の対応の不備に起因する損害については、事業者は、その限度においてその責めを負うものとする。

第8章 契約の解除

- 1 市は、事業者が次の各号のいずれかに該当するときは、契約を解除することができる。
 - (1) 市が、相当の期間を定めて催告したにもかかわらず、正当な理由なく、契約上の業務に着手すべき期日を過ぎても業務に着手しないとき。
 - (2) 契約上の業務について業務要求水準書に従った義務の履行を行わない場合であって、別に定めるところにより市がこの契約を解除する権利を取得するに至ったとき。
 - (3) 破産、会社更生、民事再生若しくは特別精算の手続の開始その他これらに類似する破産手続の開始の申立てを取締役会において決議したとき又は第三者の申立てによって当該手続が開始されたとき。
 - (4) 業務契約の後に、事業者の構成員が入札説明書等に示す入札参加者の参加資格要件を満たさなくなった際に、市が事業者及び構成員（代表企業）に対し

て一定の期限を定めて対応を催告し、この期限を経過しても改善されないとき。

- (5) この事業の遂行を放棄し、当該状態が 30 日以上継続したとき。
 - (6) 前各号に掲げる場合のほか、市が相当の期間を定めて催告したにもかかわらず、契約上の義務に違反し、かつ、その違反により契約の目的を達することができないと認められるとき。
- 2 事業者は、次の各号のいずれかに該当するときは、契約を解除することができる。
- (1) 市が契約上のサービス対価の支払いを遅延し、事業者が相当の期間を定めて催告したにもかかわらず、当該義務を履行しないとき。
 - (2) 事業者が相当の期間を定めて催告したにもかかわらず、市が契約上の義務に違反し、かつ、その違反により契約の履行が困難となったとき。

第 9 章 不可抗力等に伴う措置

- 1 不可抗力または法令変更等により本業務の継続が著しく困難となった場合、本業務を継続するかどうかについて、市と事業者で協議するものとする。
- 2 本業務を継続することについて合意できない場合、一定の期限の経過後、市または事業者は契約を解除することができるものとする。

第 10 章 契約解除に伴う損害賠償等

- 1 契約解除により生じた当事者並びに第三者に与えた損害賠償については、契約解除の原因が事業者の責に帰すべき事由による場合は事業者の負担とし、市の責に帰すべき事由による場合は市が負担する。
また、事業者又は市のいずれにも帰すことのできない事由による場合は、市と事業者で協議して定める。
- 2 事業者に起因する事由で契約が解除された場合は、事業者は市に対して違約金を支払わなければならない。違約金の額の割合は、市が別に定める。
- 3 市が被った損害額が、市が定める違約金の額を上回る場合、市は係る超過額について、事業者に損害賠償請求を行うことができる。
- 4 富田林市業務契約約款 4 条に定めるところにより、市を被保険者とする履行保証保険契約が締結されているときは、市は、当該履行保証保険契約の保険金を受領し、これをもって違約金及び損害賠償に充当することができる。

第 11 章 契約終了時の措置

業務期間の満了または契約解除により終了した場合、事業者は、市または市の

指示する者に対し、本業務の運営事務を円滑に引継ぐものとする。

第 12 章 権利義務の譲渡の制限

事業者は、予め書面による市の承諾を得た場合でなければ、次の各号の行為を行ってはならない。

- (1) 本契約書の権利義務を第三者に譲渡し、担保に供し、又はその他の処分をすること
- (3) 他の法人と合併すること

第 13 章 支払い遅延損害金

市は、業務契約に基づいて履行すべき支払いを遅延した場合は、富田林市業務委託契約約款第 29 条に定めるところにより、遅延金を支払うものとする。

第 14 章 保険加入義務

市は、業務契約の実施に必要な場合には、事業者は、必要事項に係る保険に加入する義務を課すことができる。保険加入に係る費用については、事業者の負担とする。

第 15 章 守秘義務

市並びに事業者は、本業務の実施過程において知り得た個人及び相手方の秘密に属する事項を、第三者に漏らしてはならない。

第 16 章 疑義に関する協議

市並びに事業者は、富田林市浄化槽整備推進事業に関する条例、入札説明書等及び提案内容において定めのない事項について定める必要が生じた場合、または、疑義が生じた場合は誠意を持って協議しなければならない。

【別紙 4-1】浄化槽保守点検実施細目

第1章 目的

この実施細目は、第一期 P F I 事業整備等浄化槽保守点検等包括業務に関する条件規定書（以下「本書」という。）第4章第3項に基づいて、浄化槽を円滑に保守点検するために必要な実施細目を定めるものである。

第2章 保守点検の範囲

本業務において規定する保守点検の範囲は次のとおりとし、その対象地区は富田林市浄化槽整備推進事業に関する条例第3条に定める処理区域のうち、平成17年7月8日付富田林市公示第6号の区域（大字龍泉及び大字甘南備の全部並びに大字佐備及び大字彼方の各一部）、並びに平成22年8月16日付富田林市公示第6号の区域（通法寺町の全部並びに西条町一丁目、西条町二丁目の一部）で、平成17年12月22日から平成23年12月21日までの間に第一期 P F I 事業で整備又は同期間に寄附された浄化槽に限る。

- (1) 法律並びに関連法令に定められた浄化槽の定期点検及び検査。
- (2) 浄化槽の性能維持のために必要となる啓発並びに応急的措置。
- (3) 上記のほか提案内容並びにこれらに関連する事務処理。

第3章 保守点検計画書の提出

事業者は、毎年3月31日にまでに、次年度の浄化槽の保守点検業務に関する計画書を作成し、市に提出し同意を得るものとする。

平成27年度については、平成27年12月21日までに、平成27年度の浄化槽の保守点検業務に関する計画書を作成し、市に提出し同意を得るものとする。

第4章 業務の実施

事業者は、浄化槽法及び大阪府浄化槽維持管理指導要領のうち汚泥の清掃運搬を除く内容に基づき、浄化槽の保守点検を適切に実施するものとする。

第5章 保守点検単価

- 1 浄化槽の1基当たりの保守点検単価は、業務契約に定める単価によるものとする。なお、部品交換等が必要な修繕業務の費用については、提案内容の範囲については事業者の負担とし、提案内容以外の範囲については市の負担とする。

- 2 保守点検の実施回数が年間保守点検回数に満たない場合の保守点検単価については、保守点検を実施した回数を浄化槽毎の年間保守点検回数で除した値に、業務契約に定める年間保守点検単価を乗じた額とする。

第6章 保守点検費用の支払い

- 1 事業者は、毎年度末までに当該年度の保守点検に関する実績報告書を作成し、前条に基づいて算定される金額を市に請求するものとする。
- 2 市は、請求書受領後、速やかに事業者に対して保守点検費用を支払うものとする。

第7章 浄化槽管理士の配置

事業者は、浄化槽の保守点検において浄化槽法等の規定に基づき浄化槽管理士を配置し、保守点検に立ち合わせるものとする。

【別紙 4-2】富田林市業務委託契約約款

富田林市業務委託契約約款

昭和63年3月18日制定

富田林市告示第9号

(総則)

第1条 発注者及び受注者は、契約書記載の業務（以下単に「業務」という。）の委託契約に関し、契約書に定めるもののほか、この約款に基づき、別冊の図面及び仕様書（現場説明書及び現場説明に対する質問回答書を含む。以下これらの図面及び仕様書を「設計図書」という。）に従いこれを履行しなければならない。

2 この契約の履行に関し、受注者から発注者に提出する書類は、発注者の指定するものを除き、第9条に規定する監督職員（以下「監督職員」という。）を経由するものとする。

3 前項の書類は、監督職員に提出された日に発注者に提出されたものとみなす。

(秘密の保持)

第2条 受注者は、業務の処理上知り得た秘密を他人に漏らしてはならない。

2 受注者は、成果品（業務の履行の課程において得られた記録等を含む。）を他人に閲覧させ、複写させ、又は譲渡してはならない。ただし、発注者の書面による承諾を得たときはこの限りではない。

(工程表)

第3条 受注者は、この契約締結後遅滞なく設計図書に基づいて、工程表を作成し、発注者に提出しなければならない。

2 発注者は、前項の工程表の提出を受けたとき、遅滞なくこれらを審査し、不相当と認めたときは受注者と協議するものとする。

(契約の保証)

第4条 受注者は、この契約の締結と同時に、次の各号のいずれかに掲げる保証を付さなければならない。ただし第5号の場合においては、履行保証保険契約の締結後、直ちにその保険証券を発注者に寄託しなければならない。

(1) 契約保証金の納付

(2) 契約保証金に代わる担保となる発注者が認める有価証券等の提供

(3) この契約による債務の不履行により生ずる損害金の支払いを保証する銀行、発注者が確実と認める金融機関又は保証事業会社（公共工事の前払金保証事業に関する法律（昭和27年法律第184号）第2条第4項に規定する保証事業会社をいう。以下同じ。）の保証

(4) この契約による債務の履行を保証する公共工事履行保証証券による保証

(5) この契約による債務の不履行により生ずる損害をてん補する履行保証保険契約の締結

2 前項の保証に係る契約保証金の額、保証金額又は保険金額（第4項において「保証の額」という。）は、業務委託料の100分の10以上としなければならない。

3 第1項の規定により、受注者が同項第2号又は第3号に掲げる保証を付したときは、当該保証は契約保証金に代わる担保の提供として行われたものとし、同項第4号又は第5号に掲げる保証を付したときは、契約保証金の納付を免除する。

4 業務委託料の変更があった場合には、補償の額が変更後の業務委託料の業務委託料の100分の10に達するまで、発注者は、保証の額の増額を請求することができ、受注者は、補償の額の減額を請求することができる。

(権利義務の譲渡等及び著作権の帰属)

第5条 受注者は、この契約により生ずる権利又は義務を第三者に譲渡し、又は承継させてはならない。ただし、発注者の書面による承諾を得た場合は、この限りではない。

2 発注者は、この契約の成果品を自由に使用し、又はこれを使用するにあたり、その内容等を変更すること

が出来る。

3 この契約の目的物（業務の履行の課程において得られた記録等を含む。）について、その著作権は、すべて発注者に帰属する。

（一括委任又は一括下請負の禁止）

第6条 受注者は、業務の全部又は大部分を一括して第三者に委任し、又は請負わせてはならない。ただし、あらかじめ、発注者の書面による承諾を得た場合は、この限りではない。

（下請負人の通知および変更）

第7条 受注者は、下請負人を決定したときは、直ちに発注者に通知しなければならない。

2 発注者は、前項の下請負人が不適当であると認めるときは、受注者に対してその変更を請求することができる。

（特許権等の使用）

第8条 受注者は、特許権その他第三者の権利の対象となっている実施方法を使用するときは、その使用に関する一切の責任を負わなければならない。ただし、発注者がその実施方法を指定した場合において、設計図書に特許権その他第三者の権利の対象である旨の明示がなく、かつ、受注者がその存在を知らなかったときは、発注者は、受注者がその使用に関して要した費用を負担しなければならない。

（監督職員）

第9条 発注者は、自己に代わって監督又は指示をする監督職員を選定する事ができる。

2 監督職員は、この約款の他の条項に定めるもの及びこの約款に基づく発注者の権限とされる事項のうち発注者が必要と認めて監督職員に委任したもののほか、設計図書で定めるところにより、次に掲げる権限を有する。

- (1) 契約の履行についての受注者又は受注者の現場代理人に対する指示、承諾又は協議
- (2) 設計図書に基づく業務の履行のための詳細図等の作成及び交付又は受注者が作成したこれらの図書の承諾
- (3) 設計図書に基づく工程の管理、立合、業務の履行の状況の検査

3 前項の規定に基づく監督職員の指示又は承諾は、原則として書面により、これを行わなければならない。（現場代理人等）

第10条 受注者は、次の各号に掲げる者を定め書面によりその氏名を発注者に通知しなければならない。これらの者を変更したときも同様とする。

- (1) 業務を完成させるに足る資格を持つ現場代理人
- (2) 主任技術者

2 現場代理人は、この契約の履行に関し、その運営、取締まりを行うほか、この契約に基づく受注者の権限（業務委託料の変更、履行期間の変更、業務委託料の請求及び受領、次条第1項、第2項、第5項及び第6項に係る権限並びにこの契約の解除に係るものを除く。）を行使することができる。

3 受注者は、前項の規定にかかわらず、自己の有する権限のうち、これを現場代理人に委任せず自ら行使しようとするものがあるときは、あらかじめ、当該権限の内容を書面により発注者に通知しなければならない。

4 現場代理人及び主任技術者は、これを兼ねることができる。

（業務関係者に関する措置請求）

第11条 発注者又は監督職員は、現場代理人がその職務（主任技術者と兼任する現場代理人にあつてはそれらの者の職務を含む。）の執行につき不適当と認められるときは、受注者に対して、その理由を明示した書面により、必要な措置をとるべきことを求めることができる。

2 受注者は、前項の規定による請求があったときは、当該請求に係る事項について決定し、その結果を、請求を受理した日から10日以内に書面により発注者又は監督職員に通知しなければならない。

3 発注者又は監督職員は、主任技術者（現場代理人を兼任する者を除く。）その他受注者が業務を履行するために使用している下請負人、労働者等で業務の履行の管理につき著しく不適当と認められるときは、受注

者に対して、その理由を明示した書面により、必要な措置をとるべきことを求めることができる。

4 受注者は、前項の規定による請求があったときは、当該請求に係る事項について決定し、その結果を請求を受理した日から10日以内に書面により発注者又は監督職員に通知しなければならない。

5 受注者は、監督職員がその職務の執行につき著しく不相当と認められるときは、発注者に対してその理由を明示した書面により、必要な措置をとるべきことを求めることができる。

6 発注者は、前2項の規定による請求があったときは、当該請求に係る事項について決定し、その結果を、請求を受理した日から10日以内に書面により受注者に通知しなければならない。

(業務委託の調査等)

第12条 発注者は、必要と認めるときは、受注者に対して業務の処理状況につき調査をし、又は報告を求めることができる。

(不適当な業務)

第13条 受注者は、業務の実務が設計書又は仕様書に適合しない場合において、発注者が再業務を請求したときは、これに従わなければならない。この場合において、受注者は、業務委託料の増額又は履行期間の延長を請求することはできない。

(業務の変更、中止等)

第14条 発注者は、必要があると認めるときは、受注者に対して書面による通知により、業務内容を変更し、又は、業務の全部若しくは一部の履行を一時中止させることができる。この場合において、発注者は、必要があると認められるときは、次項の定めるところにより、履行期間若しくは業務委託料を変更し、又は必要な費用等を負担しなければならない。

2 履行期間又は業務委託料の変更は、発注者と受注者との間で協議して定める。

(受注者の請求による履行の期間の延長)

第15条 受注者は、天候の不良等その責に帰すことができない理由その他の正当な理由により履行期間内に業務を完成することができないときは、発注者に対して遅滞なくその理由を明らかにした書面により履行期間の延長を求めることができる。この場合における延長日数は、発注者と受注者との間で協議して書面により定めなければならない。

(発注者の請求による履行の期間の短縮等)

第16条 発注者は、特別の理由により履行期間を短縮する必要があるときは、受注者に対して書面により履行期間の短縮を求めることができる。この場合における短縮日数は、発注者と受注者との間で協議して書面により定めなければならない。

2 発注者は、この約款の他の条項の規定により履行期間を延長すべき場合において、特別の理由があるときは、受注者と協議の上通常必要とされる履行期間の延長を行わないことができる。

3 前2項の場合において、必要があると認められたときは、発注者と受注者との間で協議して業務委託料を変更しなければならない。

(急激なインフレーションによる業務委託料の変更)

第17条 履行期間内にインフレーションその他の予期することができない特別の事情により、賃金又は物価に著しい変動を生じ、業務委託料が著しく不相当となったときは、発注者と受注者との間で協議して業務委託料を変更するものとする。

(一般的損害)

第18条 業務の処理に関し発生した損害(第三者に及ぼした損害を含む。)のため必要の生じた経費は、受注者の負担とする。ただし、その損害が発注者の責に帰すべき事由による場合においては、その損害のため生じた経費は発注者の負担とし、その額は発注者と受注者との間で協議して定める。

(業務委託料の変更に代える業務内容の変更)

第19条 発注者は、第8条、第14条、第16条又は第17条の規定により業務委託料を増額すべき場合(費用を負担すべき場合を含む。)において、特別の理由があるときは、業務委託料の増額の全部又は一部に代

えて業務内容を変更することができる。この場合において、変更すべき業務内容は、発注者と受注者との間で協議して定める。

(検査及び引渡し)

第20条 受注者は、業務が完了したときは、その旨を書面により発注者に通知しなければならない。

2 発注者又は発注者が検査を行うものとして定めた職員（以下「検査職員」という。）は、前項の規定による通知を受けたときは、その日から起算して10日以内に受注者の立会いのうえ業務の完了を確認するための検査を完了しなければならない。

3 発注者は、前項の検査によって業務の完了を確認した後、受注者が書面により引渡しを申し出たときは、直ちに当該業務目的物の引渡しを受けなければならない。

4 発注者は、受注者が前項の申出を行わないときは、業務委託料の支払の完了と同時に当該業務目的物の引渡しを求めることができる。この場合においては、受注者は、直ちにその引渡しをしなければならない。

5 受注者は、業務が第2項の検査に合格しないときは、直ちに修補して発注者の検査を受けなければならない。この場合においては、修補の完了を業務の完了とみなし、前4項の規定を適用する。

(業務委託料の支払い)

第21条 受注者は、前条第2項の検査に合格したときは、書面により業務委託料の支払いを請求することができる。

2 発注者は、前項の規定による請求があったときは、請求を受けた日から30日以内に業務委託料を支払わなければならない。

3 発注者がその責に帰すべき事由により前条第2項の期間内に検査をしないときは、その期限を経過した日から検査をした日までの期間の日数は、前項の期間（以下「約定期間」という。）の日数から差し引くものとする。この場合において、その遅延日数が約定期間の日数を超えるときは、約定期間は、遅延日数が約定期間の日数を越えた日において満了したものとみなす。

(部分使用)

第22条 発注者は、第20条第3項又は第4項の規定による引渡し前においても、業務目的物の全部又は一部を受注者の書面による同意を得て使用することができる。

2 前項の場合においては、発注者は、その使用部分を善良な管理者の注意をもって使用しなければならない。

3 発注者は、第1項の使用により、受注者に損害を及ぼし、又は受注者の費用が増加したときは、その損害を賠償し、又は増加費用を負担しなければならない。この場合における賠償額又は負担額は、発注者と受注者との間で協議して定める。

(前金払)

第23条 受注者は、公共工事の前払金保証事業に関する法律（昭和27年法律第184号）第2条第4項に規定する保証事業会社（以下「保証事業会社」という。）と履行期間を保証期限とし、同条第5項に規定する保証契約（以下「保証契約」という。）を締結して、発注者に対して前払金の支払を請求することができる。

2 受注者は、前項の保証契約を締結したときは直ちにその保証証書を発注者に寄託しなければならない。

3 発注者は、第1項の規定による請求があったときは、その日から起算して30日以内に前払金を支払わなければならない。

4 受注者は、業務委託料が業務内容の変更その他の理由により120/100以上に増加した場合においては、発注者と受注者との間で協議して定めた前払金の総額から、受領済みの前払金額を差し引いた額に相当する額以内の前払金の支払を請求することができる。この場合においては第3項の規定を準用する。

5 受注者は、業務委託料が減額した場合において、受領済みの前払金額が減額後の委託金額の4/10を超えるときは、その減額のあった日から30日以内にその超過額を返還しなければならない。

6 前項の期間内で前払金の超過額を返還する前に更に業務委託料を増額した場合において、増額後の業務委託料が減額前の業務委託料以上の額であるときは、受注者は、その超過額を返還しないものとし、増額後の

業務委託料が減額前の業務委託料未済の額であるときは、受注者は、受領済の前払金の額からその増額後の業務委託料の4/10の額を差し引いた額を返還しなければならない。

- 7 発注者は、受注者が第5項の期間内に超過額を返還しなかったときは、その未返還額につき、第5項の期間を経過した日から返還をするまでの期間について、その日数に応じ、当該契約締結の日における政府契約の支払遅延防止等に関する法律（昭和24年法律第256号）第8条規定による財務大臣が銀行の一般貸付利率を勘案して決定する率で計算した額の遅延利息の支払いを請求することができる。

（保証契約の変更）

第24条 受注者は、前条第4項の規定により受領済みの前払金に追加してさらに前払金の支払いを請求する場合には、あらかじめ履行期間を延長した場合には直ちに、保証契約を変更し、変更後の保証証書を発注者に寄託しなければならない。

- 2 前項に定める場合のほか、前条第5項の規定により業務委託料を減額した場合又は履行期間を短縮した場合において、保証契約を変更したときは、受注者は、変更後の保証証書を遅滞なく発注者に寄託しなければならない。

（前払金の使用等）

第25条 受注者は、前払金をこの業務の材料費、労務費、機械器具の賃借料、機械購入費（この業務において償却される割合に相当する額に限る。）、動力費、支払運賃、修繕費、仮設費、労働者災害補償保険料及び保証料に相当する額として、必要な経費以外の支払に充当してはならない。

（第三者による代理受領）

第26条 受注者は、発注者の承諾を得て業務委託料の全部又は一部の受領につき、第三者を代理人とすることができる。

- 2 発注者は、前項の規定により受注者が第三者を代理人とした場合において、受注者の提出する支払請求書に当該第三者が受注者の代理人である旨の明記がなされているときは、当該第三者に対して第21条の規定に基づく支払をしなければならない。

（前払金等の不払に対する受注者の業務中止）

第27条 受注者は、発注者が第23条において準用される第21条の規定に基づく支払いを遅延し、相当の期間を定めてその支払を求めたにもかかわらず支払いをしないときは、業務の全部又は一部の履行を一時中止することができる。この場合においては、受注者は、遅滞なくその理由を明示した書面により、その旨を発注者に通知しなければならない。

（かし担保）

第28条 業務目的物にかしがあるときは、発注者は、受注者に対して相当の期間を定めてそのかしの修補を請求し、又は修補に代え若しくは修補とともに損害の賠償を請求することができる。ただし、かしが重要ではなく、かつ、その修補に過分の費用を要するときは、発注者は、修補を請求することができない。

2 前項の規定によるかしの修補又は損害賠償の請求は、第20条第3項又は第4項の規定による引渡しを受けた日から1年以内にこれを行わなければならない。ただし、そのかしが受注者の故意又は重大な過失により生じた場合には、当該請求をすることができる期間は10年とする。

3 発注者は、業務目的物の引渡しの際にかしがあることを知ったときは第1項の規定にかかわらず、遅滞なく書面によりその旨を受注者に通知しなければ、当該かしの修補又は損害賠償の請求をすることができない。ただし、受注者がそのかしがあることを知っていたときは、この限りではない。

（履行遅滞の場合における損害金等）

第29条 受注者の責に帰すべき事由により履行期間内に業務を完了することができない場合において工期経過後相当の期間内に完了する見込みのあるときは、発注者は、受注者から損害金を徴収して履行期間を延長することができる。

2 前項の損害金の額は、業務委託料から引渡し部分に相応する業務委託料を控除した額につき、遅延日数に応じ、第23条第7項に定める率で計算した額とする。

3 発注者の責に帰すべき事由により、第21条第2項の規定による業務委託料の支払いが遅れた場合においては、受注者は、未受領金額につき、遅延日数に応じ、前項の率で計算した額の遅延利息の支払いを発注者に請求することができる。

(発注者の解除権)

第30条 発注者は、受注者が次の各号の一に該当するときは、契約を解除することができる。

- (1) その責に帰すべき事由により履行期間内又は履行期間経過後相当の期間内に業務を完成する見込みがないと明らかに認められるとき。
- (2) 正当な理由がないのに、業務に着手すべき時期を過ぎても業務に着手しないとき。
- (3) 前2号に掲げる場合のほか、契約に違反し、その違反により契約の目的を達成できないと認められるとき。
- (4) 第32条第1項の規定によらないで契約の解除を申し出たとき。
- (5) 受注者（受注者が共同企業体であるときは、その構成員のいずれかの者。以下この号において同じ。）が次のいずれかに該当するとき。

ア 個人である入札参加資格業者及び法人である入札参加資格業者の役員等が、暴力団員であると認められるとき。

イ 入札参加資格業者及びその役員等が、自己、自社若しくは第三者の不正の利益を図る目的又は第三者に損害を加える目的をもって、暴力団又は暴力団員を利用するなどしたと認められるとき。

ウ 入札参加資格業者及びその役員等が、いかなる名義をもってするかを問わず、暴力団又は暴力団員に対して、金銭、物品その他の財産上の利益を不当に与えたと認められるとき。

エ 入札参加資格業者及びその役員等が、暴力団又は暴力団員と社会的に非難されるべき関係を有していると認められるとき。

オ 入札参加資格業者及びその役員等が、下請契約等、資材・原材料の購入契約その他の契約に当たり、その契約相手方の入札参加資格の有無にかかわらず、アからエまでのいずれかに該当する者であると知りながら、当該契約を締結したと認められるとき。

2 発注者は、前項の規定により契約が解除したときは、業務の出来高部分の検査のうえ当該検査に合格した部分の引渡しを受けるものとし、当該引渡しを受けたときは、当該引渡しを受けた出来高部分に相応する業務委託料を受注者に支払わなければならない。

3 第2項の場合において、第23条の規定による前払金の支払があったときは、当該前払金の額を第2項の出来形部分に相応する業務委託料から控除する。この場合において、受領済の前払金になお余剰があるときは、受注者は、その余剰額に前払金の支払の日から返還の日までの日数に応じ、第23条第7項に定める率で計算した額の利息を付して発注者に返還しなければならない。

4 第1項の規定により契約が解除された場合においては、受注者は、業務委託料の5/100に相当する額を違約金として発注者の指定する期間内に支払わなければならない。

第31条 発注者は、業務が完成しない間は、前条第1項の規定する場合のほか必要があるときは、契約を解除することができる。

2 前条第2項及び第3項の規定は、前項の規定により契約を解除した場合に準用する。ただし、前条第3項の規定のうち利息に関する部分は、これを準用しない。

3 発注者は、第1項の規定により契約を解除した場合において、これにより受注者に損害を及ぼしたときは、その損害を賠償しなければならない。この場合における賠償額は、発注者と受注者との間で協議して定める。

(受注者の解除権)

第32条 受注者は、次の各号の一に該当するときは、契約を解除することができる。

- (1) 第14条第1項の規定により業務の内容を変更したため業務委託料が2/3以上減少したとき。
- (2) 第14条第1項の規定による業務の履行の中止期間が履行期間の5/10（履行期間の5/10が6月を超えるときは、6月）を超えたとき。ただし、中止が業務の一部のみの場合は、その一部を除いて他の部分の業務が完了した後3月を経過しても、なおその中止が解除されないとき。
- (3) 発注者が契約に違反し、その違反により業務を完成することが不可能になったとき。

2 第30条第2項、第3項及び前条第3項の規定は、前項の規定により契約が解除された場合に準用する。
ただし、第30条第3項の規定のうち利息に関する部分は、これを準用しない

(賠償金等の徴収)

第33条 受注者がこの約款の各条項に基づく賠償金、損害金又は違約金を発注者の指定する期間内に支払わないときは、発注者は、その支払わない額が発注者の指定する期間を経過した日から業務委託料支払いの日まで第23条第7項に定める率で計算した利息を付した額と、発注者の支払うべき業務委託料とを相殺し、なお不足があるときは追徴する。

2 前項の追徴する場合には、発注者は、受注者から遅滞日数につき前項の率で計算した遅滞金を徴収する。

(補則)

第34条 業務の履行に当り、工事の施工を伴う業務については、その工事の施工については、富田林市建設工事請負契約約款を準用し、本市建設工事請負必携に従うものとする。

第35条 この約款に定めのない事項については、必要に応じて発注者と受注者との間で協議して定める。

平成18年 1月1日 一部改正

平成19年 7月1日 一部改正

平成23年12月1日 一部改正